

APDの自己管理へ向けての指導方法の検討 ～写真付きパンフレットを用いて～

Examination of the teaching method towards self-control of APD

～ Use a pamphlet with a photograph ～

東7階病棟

井畑さやか 米山はるか 三村千代美 茅野郁子 中西美佐穂

〈要旨〉透析には血液透析と腹膜透析の2種類があり、腹膜透析は自宅で透析を行えるメリットがある。しかし、自宅で行う治療の為、患者は透析手順や機械操作などを獲得する事が課題となる。A病棟では、患者指導にパンフレットを用いている。今回、自動腹膜透析導入を希望した患者で、手技獲得が困難な事例があった。そこで、患者が理解しやすい写真付きパンフレットを作成し指導に活用したところ、患者の理解度が上がり手技獲得に効果が見られた。さらに、そのパンフレットは看護師の指導の質向上にも役立つことに繋がった。

キーワード：腹膜透析，APD，写真付きパンフレット

1. はじめに

透析には血液透析と腹膜透析の2種類がある。それぞれメリットとデメリットがあるが、腹膜透析は血液透析と違い、自宅で透析を行えるメリットがある。しかし、患者は機械操作などの手技を獲得することや清潔なカテーテル管理を求められ、自己管理していくことが大きな課題となる。

日本透析医学会の調査（2011年調べ）では、血液透析96.8%、腹膜透析3.2%の割合であり、A病院では腹膜透析を導入した患者は、2011年に5名、2012年に8名であった。

A病棟の指導にはパンフレットを用いている。今までは特に問題なく患者は手技を獲得し、

自己管理できていた。しかし今回、機械操作が苦手などの理由から、今までの指導方法では手技獲得が困難な事例があった。そこで、指導や手技をもっとわかりやすいものにする必要があると考え、写真付きパンフレットを作成した。その活用により、患者の手技獲得が目覚ましく向上し、さらに患者からもその指導方法に良い評価を得られたので、その取り組みについて報告する。

A病棟では、腹膜透析の仕組みを理解する事や災害時や旅行等日常生活の事を考え、自動腹膜透析（Automated Peritoneal Dialysis 以下APDとする）希望患者も持続式携帯型腹膜透析（Continuous Ambulatory Peritoneal Dialysis 以

表1 【術後8日目よりCAPD 4回/日開始】

日数	指導内容	患者の反応	手技獲得状況
CAPD 1日目	パンフレット使用 初回は看護師が行いAさんには見学してもらう	声を出し、確認しながら行う	2回目からは看護師見守りにて実施できる
2日目	2回目からAさんにCAPDを行ってもらおう	「やり方もある程度大丈夫そう」	フレンジブルシールの折り忘れが数回あったが、看護師の声かけにて改善される
3日目		「外泊中も透析はしっかりできたよ」	手技が自立し、外泊にも行くことが出来る
4日目			手技自立

下CAPDとする) 経験後にAPDを開始している。

いことで不利益が生じないことを説明した。調査内容・結果は本研究のみに使用し、途中で中止できること、また、個人が特定されないようにプライバシーを厳守することで同意を得た。

キーワード：腹膜透析，APD，写真付きパンフレット

2. 倫理的配慮

対象者に、本研究の主旨と、研究へ参加しな

3. 事例紹介

Aさん 60歳代 女性。専業主婦，日中は農

表2【術後15日目よりAPD開始】

日数	指導の実際	患者の反応	手技獲得状況
APD 1日目	APD開始(2回/日) 初回はパンフレットをAさんと共に見ながら手技を説明し実施。 2回目はAさんが主体となりプライミングを実施	「また難しそうですね。前やった(CAPD)のと同じ?」	パンフレットは見ずに看護師に聞きながら実施
2日目	看護師の声かけでプライミング実施。		夜間のAPDプライミングに最終注液ラインを間違える事あり。
3日目	自立している所が無かったため、パンフレットを必ず見ながら操作するよう指導	「パンフレットは文字がいっぱいだしわかりにくい」 「看護師それぞれ言うことが違うから出来ないんだ」	パンフレットを見ない。 手順の意味を理解せずに自分なりのAPD操作を行っている。
4日目		「クランプのどこを開けていいのかわからない」 「覚えられない」	パンフレットを見ずに看護師へ全て確認しながらプライミングを行う。
5日目	APD操作の写真を付けたパンフレットを作成し渡す	「これいいじゃない!」 「これなら出来そう」	写真付きパンフレットを見てAPD操作を行う事ができ、看護師は見守りのみ行う。
6日目	写真付きパンフレットを見て確認するよう指導。	不安ありたびたび操作の確認を看護師に聞いてくる。	パンフレット見ながら自分で行う事ができる
7日目	写真付きパンフレットの説明文まで読むように指導。 指導の実際	「金曜日には帰るから早くできるようにならないと!」と、退院日が近づいてきており焦っている様子。	パンフレットは見ているが写真のみの確認で説明文を読まずに進める
8日目			看護師の見守りで実施できる。
9日目		「パンフレットは本当に見やすい。初めからあったら良かったのに」	自立
10日目	在宅と同様、1日1回のAPD時間で腹膜透析開始		
12日目		「頑張れるよ。パンフレットちゃんと見てやればできるからね。」	

業手伝い。家族構成は夫と2人暮らし。夫と、近くに住む娘はAPD導入に協力的であった。

IgA腎症と診断され、高血圧、高K血症を中心に内服治療、食事療法で管理していたが、徐々に腎機能悪化あり、腎代替療法を行うことになった。患者はAPDを希望され、2012年11月入院。その後カテーテル留置術施行。

入院期間：29日間

4. 看護の実際

以下は指導内容と患者の反応・手技獲得状況の経過。

【腹膜透析導入前】

患者はパンフレットを時々見ていたが、内容がわかりにくく理解はできていないようだった。「機械操作は苦手」との言葉があった。

上記のようにAさんより、「パンフレットはわかりにくい」との訴えがあったためAさんにわかりやすいパンフレットの導入となった。Aさんにとって、わかりにくい点を明らかにし、改善点を以下のように挙げた。

5. 考察

腹膜透析にはCAPDとAPDの2種類がある。CAPDは1日で2～4回程度患者が透析を行うが、APDは、機械で自動的に夜間2～5回程度透析を

行うという違いがある。そのためAPDは日中の透析が不要であり、時間にとらわれずに活動できる。よって、日中2～4回行うCAPDより患者はメリットを感じ、APDを希望するケースが多い。しかし、CAPDからAPDへ移行した時点で、機械操作の複雑さに驚く患者も少なくない。おそらくAさんもその1人であったと考えられる。石田¹⁾は、「透析治療導入前の生活状況に出来るだけ近い透析生活を患者に提供するのが、透析治療の目標である」、また、小島²⁾は「教育プログラムを計画するときの最初の仕事はデータの収集であり、相手の特性を知ることが重要である」と述べている。APDを実際に行う前に情報収集やアセスメントを行い、患者の理解度に合わせた指導方法の評価・修正が必要である。

今回Aさんは、CAPDでは、パンフレットを用いての指導で、問題なく手技を獲得できた。同様にAPDでもパンフレットを用いて指導を開始したが、機械操作が苦手などの理由で、操作の混乱が多く、今までの指導方法では困難であった。

そこで、Aさんの「APDを行っていきたい」という思いを尊重し、指導方法の検討を行い、新たにパンフレットを作成した。以前のパンフレットは、実際の操作を一つずつ確認できる表示でなかったため、一回の操作ごとにパンフレットを確認できるように、操作ごとの写真表示とした。写真付きパンフレットは操作手順通りの

表3

パンフレットの問題点	写真付きパンフレットの改善点
・イラストでありイメージしにくい	・操作している様子や実際に表示される画面を撮影したものを添付した
・APDの機械画面に何が表示されるか文字でしか書かれていない	・機械のボタンで何を押し、どのような表示が出るか撮影し添付した(資料1)
・文字が小さく説明文が長い	・文字を大きく、説明文は簡潔に記載した
・いつ透析液を開通するか、クランプをするか等細かく書かれていない ・使われていない行程がある	・A4用紙一枚に1～2つの操作項目とし、パンフレットには書かれていなかった細かい部分まで記載した。
・一枚に集約されていてわかりにくい	・操作を実施する毎に1枚ずつめくれる形式のもの(計18枚)にし、操作の順番で綴じた

為、Aさんは、混乱なく次の操作に移ることができるようになり、確実に手技を獲得し始めた。Aさんに写真付きパンフレットを渡せたのはAPD開始後5日目であったので、もっと早くに新たなパンフレットを提供できれば、Aさんの不安が少しでも軽減できたかもしれない。また、Aさんから「看護師それぞれ言うことが違うから出来ないんだ」という言葉があったことから、看護師の指導に何らかの違いがあった可能性があり、そのことはAさんを混乱させ、手技獲得に時間を要した原因の一つであった可能性もある。APDは透析全体の3.2%（2011年調べ）の割合と少なく、A病棟のAPD導入患者も年間5～8名と少ない。そのため、対象患者がいない期間が長く空く場合があり、指導する看護師も指導経験が少ない状況である。しかし、看護師が写真付きパンフレットを指導前に確認することで、操作の順番を事前にイメージができ、経験回数や経験の期間にとらわれずに、自信をもって指導することができるのではないかと考える。そのことは、看護師の指導の質格差を少なくし、患者が安心して手技を獲得することに繋がるのではないかと考える。

透析は今後一生付き合っていかなければなら

資料1

②機械の上に透析液をのせる

* 銀色の所に当たるように・管が曲がらないように

③電源を入れると下の表示がされます



ない治療である。腹膜透析の手技を確実に行う事で病態の進行や感染を予防することに繋がる。そのため、腹膜透析を行う患者は手技に自信を持って退院することが目標となる。今後は写真付きパンフレットを患者指導や、看護師への指導にも使用していくことで、患者の手技獲得がスムーズになり、看護の質向上や指導が統一されることが期待できる。その結果、自信をもって患者が早期退院できることにも繋がると考える。

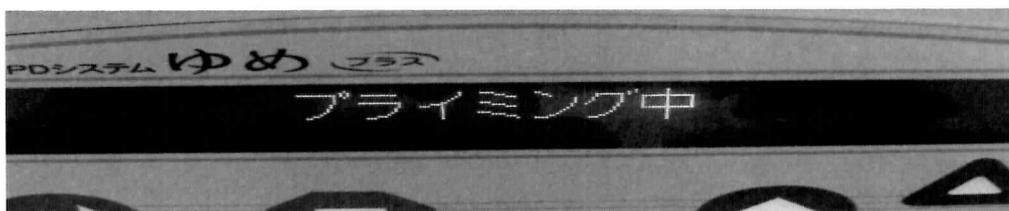
6. 結語

- 1) 写真付きパンフレットは患者の機械操作や手技獲得に有効である。
- 2) 写真付きパンフレットは看護師教育にも役立つ、指導内容の質向上に期待できる。

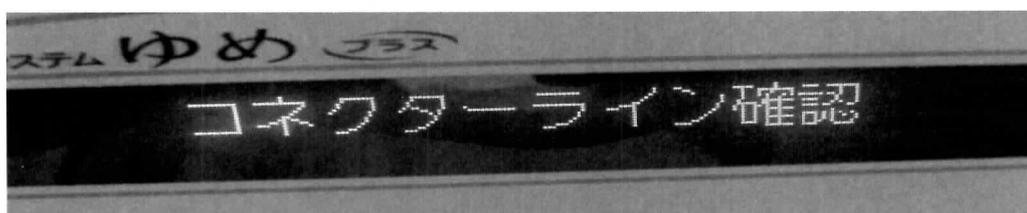
参考・引用文献

- 1) 石田尚志：在宅での生活を可能にする条件を考える。透析ケア（冬季増刊）：226－240，1997
- 2) 小島操子：患者教育の為の実践的アプローチ。pp70-87.メディカルサイエンス・インターナショナル，東京，1982

⑰開始ボタン⇨を押すと下の表示が出る



⑱約5～7分程度でプライミングが終了し、
下の表示が交互に出る



APD 終了後

①「治療終了 除水量確認後→」と表示される
ので、▽ボタンを押して初回排液量と除水量・
平均貯留時間を確認する

